
black-and-white

緋隅小夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

black-and-white

【Nコード】

N7826E

【作者名】

緋隅小夜

【あらすじ】

どこかの世界のどこかの国に、二つの噂が流れていました。「城には魔力と銀髪、白い肌と青い目を持ち、踊りと歌が得意な、隠された月の姫がいる」「黒髪に黒い瞳を持った少年は闇の魔力を持ち、闇夜に宙を舞う」。生まれつき特別な外見と力を持ったために避けられていた月の少女と闇の少年。…のお話（え。書き方が不器用なのと同じで御二人さんも不器用です）（笑。

プロローグ

彼女は白き姫君、光の化身。

彼は暗黒の貴公子、闇の化身。

光と闇。

それは、許すことのできない境。
そして、互いに惹かれあう存在。

わたしは、貴方に出会える筈では
ありませんでした。

会えるはずではなかった。

僕は、君に出

貴方は、わたしが恋した、
夜空と同じ存在でした。

した月と同じ存在だった。

君は、僕が愛

貴方はいつも独りででした。

りだった。

君はいつも独

わたしには不思議な力がありました。

僕には、不思議

議な力があった。

わたしには、月から授かった
魔力がありました。

僕には、闇か

らもらった魔力があった。

皆から気味悪がられ、閉じ込められていた
わたしを、外へ導いてくれたのは貴方でした。

れ、石を投げられてた僕を

て、優しく手を差し伸べて

くれたのは君だけだった。

皆から怖がら

理解してくれ

貴方は踊りが上手でした。

力強く、それでも柔らかに踊っていました。

上手だった。

君はダンスが
美しく、しな

やかに舞っていた。

貴方は逞しい歌声も持っていました。

君は透き通る

ような歌声も持っていた。

誰よりも、私を大切にしてくれた貴方。

を思ってくれた君。

誰よりも、僕

そんな貴方が、私は好きでした。
僕は恋しかった。

そんな君が、

ある王国では、2つの噂が流れていた。

ひとつ、「城には魔力と銀髪、白い肌と青い目を持ち、踊りと歌が得意な、隠された月の姫がいる」

ふたつ、「黒髪に黒い瞳を持った少年は闇の魔力を持ち、闇夜に宙を舞う」

そして、その噂は真実である。

少女の名はルナ・ルーチエ。

少年の名はティアーズ・ブイオ。

ルナ・ルーチエ

ある王城の、一番奥の部屋。

そこに彼女はいた。

銀色の長い髪、肌は透き通るような白、瞳はサファイアのような青。外の世界のことは何も知らない。

太陽の光が暖かいことも、月光が美しいことも、花が華麗であることも、何もかも。

彼女は、自分が閉じ込められている理由を知っていた。

「姫様」

ドアの外で声がした。

「ルナ様、ダイアナ様です」
ダイアナ、というのはルナの姉だ。彼女と同様この国の姫君である。いつも自慢げに、舞踏会や外の世界の話をする。だからルナはダイアナが苦手だった。

ほとんど表情を出さない顔に、珍しく苦々しい表情を浮かべ、ルナは「どうぞ」と、返事をした。

途端にドアは勢いよく開かれ、黄色のひらひらドレスを着た姉が、ニヤニヤ笑ってでてきた。

ルナのドレスは淡い青で、チュニツクみたいになっており、スカートは胸下から長く、それには襜ヒダがはいっている。

胸元にあるのはサファイアのネックレス。同様に、手首にも、サファイアのブレスレットが光っていた。

ルナは黄色やピンクの色を好まなかった。そして、ダイアナのようなヒラヒラドレスやフリフリドレスも好まなかった。

「おはようルナ」

「…おはようございます、姉さん」
無表情で返すルナ。

彼女は笑い方を知らないから、無表情なのは当たり前だった。まさか、泣き顔や怒り顔でおはよう、と返すわけにはいかない。

「昨日の舞踏会楽しかったのよ、超イケメンのひとがいてねえ」
またこんな話か。

ルナは溜め息をついた。

ダイアナを無視して、ひとさし指をたて、力を込めた。すべての気力、体力を指先に集中させる。

すると、小さな氷が出現し、その氷は見る間に大きくなり、手で握れるくらいになると、ルナは手でそれを握って息を吹き掛けた。手をひらいてみると、そこには美しいサファイアがあった。

「ちよつとルナ、あんた聞いている？」

「ええ」

サファイアを宝石箱にしまって、ルナは答えた。

またダイアナはひとりで話出す。

氷を出現させ、サファイアにする。これぐらい、ルナには朝飯前のことだった。

彼女の持つ力。

それは、月から授かった魔力だった。

ルナのこの力は夜、月がでる日しか使えない。つまり、新月の夜だけ弱くなる。

今日は闇に消えゆく三日月の筈、ルナは自分の魔力が弱まっていることから、そう考えた。

「でねえ…彼とダンスしたんだけどさあ。また失敗しちゃったのよ
お」

「お姉さん、まだ上手くないの…？」

ダイアナは歌もダンスも不得意である。

どこをどうしたらこんな動きができるのか、というくらい不得意なのである。

そんなダイアナに対し、ルナは踊りや歌が得意だったし、好きだった。

思わず「まだ」という言葉が、ルナの口から飛び出した。

「『まだ』とは失礼ね！」

「ごめんなさい」

「もう、気に食わないわね相変わらず」

ダイアナはルナが邪魔だった。

噂が世間に広まったことで、ルナの存在は知られていた。

滅多に人前にでないため、ルナは神秘的なイメージを国民に与えていた。

満月の夜だけ、彼女はたったひとりでホールで踊る。

神秘的な雰囲気で人々の憧れの的でありながら、彼女は恐れられ、除けられていた。

それは魔力と髪、瞳の色のため。
この国の者は、皆、髪は金か茶、瞳は茶か緑だった。

ダイアナは自分をアピールしたかった。
だから、ルナに自慢話をする。

自分が彼女より恵まれていることを確認したいがために。

「そーいえば…町で妙な噂が流れてるのよね」

「…え？」

「あら、もうこんな時間。んじゃあ、あたしは散歩に出るね。帰ったらたくさん話してあげるわ」

「…行つてらっしゃい、姉さん」

ダイアナはケラケラ笑いながらでていった。

ルナは、ダイアナの言った『妙な噂』が気になり、じいに聞くことにした。

「じい」

ルナが呼ぶと、じいは一瞬肩を震わせて、恐る恐る振り返った。

「なんでございましょう？ 姫様」

「町での妙な噂とは何ですか？ お姉様から聞いたのですが…」

「…噂ですか… 2つございますが」

「二つとも話してくださる？」

ルナが聞くと、じいは溜め息をついて言った。

「ひとつは姫様のことでございます」

「わ、わたしですか？」

「はい、ルナ様は人前に出たことがないので」

「そ、それではなぜ、わたしの噂が…」

「ホールでルナ様が踊つてらっしゃるのを見たひとがいるそうです。
また、歌声も聞こえたそうです」

ルナは呆然としていた。

踊りと歌だけならいい…。

でも…この力を知られたら…。そしてこの瞳と髪…わたしは異常な
んだ。

だからこうして閉じ込められてる…仕方ないもの…。

「…で、どのような噂が…？」

「『城には魔力と銀髪、白い肌と青い目を持ち、踊りと歌が得意な、
隠された月の姫がいる』」

ルナの表情が変わった。

誰が見た？

誰がわたしを見た？

そこで怖いと思ったの？

銀色の髪と青い瞳をどう思ったの？

踊るわたしはどう見えた？

わたしの声はどう聞こえた？

怖いと感じた？

それとも…。

でも知ってる。

いま以上に隠れなければ。

わたしは皆から恐れられている。

わたしは皆から避けられている。

それがどんなに望まないことでも。

「世間では、姫様は『ムーンライトプリンセス』、ダイアナ様は『
サンライトプリンセス』と呼ばれています」

「月光…姫…」

「ルナ様の白い肌と、髪からとった異名でしょう」
月光姫。

ルナには相応しい名前。

彼女は月の使い手なのだから。

「それで…もうひとつは」

「『黒髪に黒い瞳を持った少年は魔力を持ち、闇夜で宙を舞う』」

「く、黒…？魔力？」

ルナが驚いたのと同時に、じいは足早に去って行った。

闇の貴公子。

どんな人なのでしょう。

暗黒の息子、闇の化身、黒の像。

わたしと同じような力を持つ人。

白と黒は対極だけど、きっと思いは、わたしと同じなのでしょう。

貴方はいま、どんな気持ちで生きてるのかしら。

暗い闇に生まれた魔術師。

力のせいで避けられて。

ルナはしばらくそのまま立っていた。

ティアーズ・ブイオ

彼の住家は、アパートの廃墟。

しかし、そこにはほとんどの確率で彼はいない。

町にでると、金や茶の頭の中に、ひとつだけ真っ黒な頭がある。それが彼だ。

あちらこちらでヒソヒソと話す声が聞こえる。あちらこちらでジロジロと彼を見る。

勿論、彼に友達はいなかった。

笑うことも忘れた彼は、ただひとりで闇をさまよっていた。

：忘れたというか、笑う意味もないので、無表情だっただけなのだが。

母も恐れた闇の力。

それに髪と目の色がみんなと違うから。

「ほら…闇の貴公子…」

微かに聞こえた彼の異名。

元々、彼は身分の高い家に生まれたわけではなかったが、彼の外見は結構な二枚目であった。

ティアーズがユラリと顔を向けると、彼の異名をいった者はサッと視線を逸らした。

「あ、ねえ、ところでさあ、噂知ってるう？」

「なんの？いまの黒い奴のこと？」

「違くて」。姫がダイアナ様ともう一人いるってハナシ」

「へえ。知らないや」

ティアーズは足を止めた。

僕以外の噂？

「城には魔力と銀髪と白い肌と青い目を持ち、踊りと歌が得意な、隠された月光姫がいる　ってハナシだよ」

「カワイイのかなあ？」

「ダイアナ様よりかわいかったりして」

ティアーズは呆然とした。

自分以外に、魔力を持つ者がいたとは…。来る者すべてが、彼を横目で見ると、彼はわからない。彼の目では、すべてがモノトーンのスローモーションにうつっていた。

月光姫。

どんな娘こだろうか。

光の娘、月の化身、白の像。

ああ、僕とは対極の位置にいる少女よ。

君はいま、どんな思いで生きているのか。

力のせいで、光なのに除け者にされ、閉じ込められて。

ティアーズは呆然と立っていた。

その夜は少しずつ満ちる三日月だった。

「…月」

ルナは呟いた。月と夜空は、ルナが最も好きなものだった。

唯一自由になれる夜の時間。

皆が寝静まった深夜。

窓をあける。ひんやりとした空気が、部屋に入ってきた。窓といつても、ベランダに繋がる大きな窓だ。

部屋の明かりは消してある。

「月の光…」

ルナは静かに手を伸ばした。

彼女は夜に、こうして踊るのが好きだった。

物音ひとつ立てずに、静かに踊り出す。

静寂に溶けるかのように、その舞いは音をたてずに、それでも美しく踊られた。

その様子を庭から見る黒い影がひとつ。

もうひとつの噂、闇の貴公子といわれるティアーズ・ブイオである。

「あれが噂の」

月光姫か。

ティアーズは呟いた。

白い肌に銀色の長い髪。

瞳は青、サファイアのような。

「ほんとに光…月みたいだ」

僕が愛した月…。

僕が求める光。

「……」

部屋で舞う少女を、彼はただひたすら見ていた。

ルナがその視線に気がついたのは、数分たってからだった。
庭の端の方にいる、黒い影。

「誰？」

澄んだ高い声が響いた。

踊りをとめて、影を見つめる。

影は月光の下に、その姿を現した。

髪は黒、瞳も黒、服装も黒。

すべての闇が、そこに集まったように黒。

ルナはひとつ、心当たりがあった。

「貴方は」

すると、彼はふわりと宙に浮かび、ベランダの手摺に音もたてずに着地した。

「……」

心底驚いて声がでないルナに、彼は優雅に礼をした。

「はじめまして……ルナ・ルーチェ様」

「どうしてわたしの名を知ってるのですか？」

ルナはただそれだけを聞いた。

「噂で聞いたんです。僕の噂と一緒に」

「……じゃあ、貴方は闇の貴公子なのですね？」

「……ご存じでしたか、月光姫」

ルナは無表情のまま、微かに首を縦に振った。

「どうして、ここに？」

一番の疑問である。

彼は何故、ここにやってきたのか。
大した用もないのに。

と、彼の目が悪戯っぽく光った。

「姫君に会いに」

口元に笑みを浮かべて、彼は笑った。

どこか人懐こい表情。

その台詞も、貴公子などと呼ばれる彼らしいと感じた。

ルナは目を細めて嬉しそうに言った。

「そうですか。…きちんと名乗ってませんでしたね。わたしはルナ・ルーチェ」

「僕はティアーズ・ブイオです、ルナ様」

「ティアーズ…いい名前ね」

「…ありがとうございます」

ぎこちない会話が交わされた。

それが二人の、最初の出会いだった。

「ダンスがお好きなのですか？」

会って二度目、その日も夜で、空には三日月が浮かんでいた。ティ
アーズはルナに聞く。
ええ、とルナは頷いた。

「小さい頃、舞踏会に、と習ってました。ピアノや歌も」
「そうなんですか」

ルナはしばらく、ティアーズを見つめた。
青い瞳に捕らえられたティアーズは動けない。

「……ですます口調、やめてくださいますか？」
「そういう君も、ですます口調じゃないかい？」

ケロツというティアーズに、ルナは苦笑いを浮かべた。

早速ですます口調をとっているあたり、かなり馴れないことをして
いたみたいだ。

「わたしのは気にしないでください」
「ふーん」

にやりと笑い、ティアーズは聞いた。

「君は月は好き？」

何故、そんなことを聞くのか、ルナには理解できなかったが、素直に答えることにした。

「ええ。でも、夜空も好きです。むしろ夜空のほうが好きかもしれない」

「ふーん、僕は月のほうが好きだけど」

そういつて、ティアーズはルナを見た。

「ルナは真っ白だね、肌が」

「ずっと城の中にいますから。外には出ないの」

そういつて、ルナは少し悲しい気持ちになった。

それから、出ないというより、「出られない」というほうが正しいのではないか、とちらと考えた。

「ティアー…」

「面倒だろう？ティアでいいよ」

ルナが何か言おうとすると、ティアーズは笑ってそういつた。

「ティアだつて、肌はそんなに色黒ではないでしょう？」

「かわりに髪や瞳は真っ黒だけどね」

ティアーズは少し拗ねたような顔をした。

肌はルナのいうとおり、別に色黒ではないのだが、髪や瞳は彼の言うとおり真っ黒だった。

おまけに服装も黒。そんなに色のある服を着ることはない。

…自分がそういう種族であることを知っているから。

どうにか話を逸らそうと、ティアーズは思いついたようにぽんと手を打った。

「そうだ、ルナは外にでた事がないんだろう？出てみない？」
「えっ？」

ルナはティアーズを見た。
彼はニコニコと笑っている。

「でも…わたしは外には出られない…」

「大丈夫さ」

「見回りの者やじいがない時に来たら、大騒ぎになってしまっわ」
「大丈夫さ」

無表情ながらも慌てるルナに対し、同じ言葉を二度繰り返して、ティアーズは窓をあける。

「みんなには眠ってもらってるから」
「…え？」

きよとんとするルナを尻目に、ティアーズは手摺に飛び乗った。
それに対し、ルナはちよつとしたパニック状態。

眠ってもらっているとはどういう意味か。

「ルナ」

そんなルナに気が付いていないのか、ティアーズはルナを呼ぶ。
ルナは外に出た。それと同時に、ティアーズは庭に飛び下りた。

「おいでよ、ルナ」

「で、でも、ここ2階…」

ためらうルナに、ティアーズはウインクをして手を空に向けた。月光が彼を照らす。

黒い影となり、彼はルナに顔を向けた。

そして、真顔になり、ルナに言う。

「ルナ・ルーチェ。君に質問する。君は外に出てみたいかい？」

真顔になったティアーズを見て、ルナは可笑しく思った。

こちらも含わせて真顔になる。と、いつても、ルナは元から真顔（無表情）だが。

「ええ。わたしは外に行きたいわ」

そう答えると、ティアーズの顔は、たちまち元に戻った。まるで、道化師ようとだとルナは感じた。

「そうこなくっちゃね」

ニヤリと笑い、指を鳴す。

直後、ルナは小さく悲鳴をあげた。ルナの体は空に浮かび、ゆっくりと地に降りて行く。

ルナの足が地につくと、ティアーズは笑いかけた。

「ホントに月光の姫君なんだね、ルナは」

ティアーズには、彼女を包む月光が、彼女の魅力を最大限に出し切っているように見えた。

自分に似合わない光。それが、彼女にはとっても似合っていた。
陽光の中でも、彼女は輝くに違いない。

「そうですか？」

「うん」

ティアーズは歩き出す。

城の庭園は流石さすがに広い。

「どうだい？月の光を全身で浴びるのは」

「気持ちいいわね」

ルナは眩しそうに月を見た。

やがて、二人は庭の中心に来た。

「じゃあ、見せてもらおうかな」

「何を？」

「ルナのダンス」

さらりと言われたから、ルナは思わず頷いてしまった。

慌ててティアーズに言う。

「わ、わたしだけ？」

「僕踊れないから」

「それは嘘でしょう」

さらっというルナに、ティアーズは瞬いた。

「どうしてだい？」

「貴方の噂、黒髪に黒い瞳を持った少年は闇の魔力を持ち、闇夜に

宙を舞う…は、貴方が踊ってるのを誰かが見たのではないかしら」

「だから、それはどうしてって」

「空を飛ぶんだったら、宙を舞うなんて書き方、しないでしょっから」

ルナは誘うように手を差し出した。

ティアーズは躊躇う。

ルナは手を引つ込めない。

ルナの読みどおり、彼は踊りを踊ることはできる。

下手ではないものの、光と踊るのはやはり非常に躊躇われた。

睨み合いのような雰囲気で行われた小さな勝負は、ルナの勝利に終わった。

堪忍したティアーズはルナの手をとる。

「ティアってダンス、上手いのね」

「ま、習ってたからね。小さい頃…母さんに…兄と一緒に」

「お兄さんいるの？」

「まあね」

ステップを踏みながら話す。

ティアーズはおや、とある事に気がついた。

「ルナ」

「なに？」

「ようやくですます口調、とれたね」

「え？」

ルナは足を止めてティアーズを見た。
今までと変わらない笑顔で、彼はルナを見る。

「そう?」

「自分でも気がつかずにとれるってね。僕の御陰かな?」

意地悪そうに笑い、ティアーズは言う。
それはどうかしら、とルナは思ったが、それも一理あるとも思ったから、何も言わずに空を見た。

新月になりかけの三日月が、ただ広い空にぼつんと独り。

「ねえ」

ルナは月を見たままいう。

ティアーズはうん?と返した。

こちらはルナを真っ直ぐ見て。

「また来てくれる?また、わたしを外に連れて行ってくれますか?」

ゆっくりとティアーズを見ていう。

彼女の言葉を噛み締めて、ティアーズはゆっくりと頷いた。

「ありがとう」

それでもルナは、まだ無表情だった。

何かが彼女を咎めるような、そんな感覚にティアーズは陥った。

その顔を見てティアーズは密かに決心した。

この子を笑わせてみせる、笑顔にさせてみせる、と。

「…夜更かしするんじゃないわ…」

翌日。

ルナはベッドの上で目を擦っていた。

昨日は例の闇の貴公子と話していたため、就寝時刻がえらく遅くなった。

最後に時計を見たのが2時半。

それから記憶がないから、恐らくすぐに寝たのだろう。

現在朝7：00。4時間くらいしか寝てない事になる。

「…じい」

小さく召使を呼んだ。

すぐさまじいはやってきた。

「なんでございましょう？姫様」

「昨夜は就寝が遅かったので、しばらく寝ています。朝食はいりません」

「左様ですか」

ルナが言つと、じいはそれだけ短く答え、そそくさと部屋をでて行った。

そんなことは気にせず、ルナはモゾモゾと掛布団を羽織り、横にな

る。

第一、じいもルナの事を恐れているのは、ルナは誰よりも知っていたし、ましてや猛烈に眠くてそんなことに構っている気力なんてなかった。

目を閉じる。

視界は一気に暗黒の世界へと変わる。

直後、ルナは自ら意識を手放した。

夢を見た。

幼い時の夢。

外に出たことはない筈なのに、わたしは野原にいた。姉のディアナ、お母様も、お父様も一緒だった。

みんな笑顔だった。

見ているわたしが悲しくなるくらい、幸せそうだった。

「ルナ……って寝てるし」

ティアーズ・ブイオがルナを訪ねたのはその日の夜遅く。

もう日はとつくに沈んであたりは暗く、明りはほぼ存在しないに等しい。

夜の光源である月は細くなり、殆ど光などは発しない。

明日あたりには、もう月は消えるだろう。

ルナはただひたすら寝ていた。

朝からずっと眠ったままだった。

「うーん、やっぱり時間を考えたほうがいいかなあ」

独り言とは思えない大きな声で独り言を言うティアーズ。
腕を組んで考える。

「夜遅いもんなあ」

ルナを見る。

（おまけに不健康なほど白いし）

そう、雪のように白い肌は、不健康すぎる程、肌色からはかけ離れていた。

ティアーズはジッとその顔を見つめる。

何もすることもなく、それでもティアーズは飽きずにルナの寝顔を見続ける。

一度だけ、その白い額に手を伸ばしたが、結局触れずに引つ込めた。

その状態のまま、かなり長い時間が過ぎた。

やがて、ルナは目を覚ます。

「…ティアーズ？」

「おはようルナ。よく眠れたかい？」

「…ええ、まあ」

ルナにとって、部屋にティアーズがいることは、別に不思議ではないらしい。

側から見れば不法侵入。

が、ルナは全く気にしていないようで、寧ろ嬉しそうな響きになるのだ、彼女の声が。

相変わらず顔は無表情一色で変わる気配はない。

どうにかして笑顔が見たくて、ティアーズはルナに聞く。

「今日はどうする？外に行くかい？」

ルナは思案するようにちよいと首を傾げ、ゆっくりと答えを紡ぎ出す。

「今日は…月は、どう？」

窓を見て、ルナはティアーズに問うた。

一瞬、ティアーズの顔は強張り、そのまま黙った。
手を、何故か後ろに回して。

「…ティアーズ？」

不思議に思ったルナが振り返る。
が、そこには誰の姿もなく、ただ壁があるのみで、先程までいた筈の少年の姿は影も形もなかった。

「……？」

なかなか理解出来ないルナは、ベッドから降りて窓辺に向かう。

空には細い月があった。

「……」

無言で手を前に出す。

全ての気力を、その手に集中させる。

「…ああ」

満月の夜ならば、その手にはサファイアやらダイヤモンドやらの塊や、水が出たり氷の塊が出たりするのだが、今日は小さな氷だけしか出てこない上、その氷もすぐに溶けて、ルナの指を伝って行った。

「…ティアーズ」

新月の夜は怖い。

それに近い、細い三日月の夜も怖い。

僕の闇の力が、一番強くなる時だから。

満月の夜でも消えない程の強い闇の魔力。

だからこそ。

だからこそ、僕は怖い。

今日は、彼女のそばにはいられない。

それがどんなに僕が望まないことでも。

僕は、今夜、彼女のそばにはいられない。

新月に近くなると、彼が離れていく気がする。

わたしの手は届かない。

満月の日でも、彼はわたしに触れようとしない。

踊る時も、何処か遠慮がちで、わたしは少し不安になる。

何故かも分からない。

わたしの願いは届かない。

それが、どんなにわたしが望むことでも。

夜はとても好きだと思う。

唯一自分が自由になれるし、月光は自分を照らしてくれるし、夜空は素敵に輝いてくれるから。

日の光が差し込んで、ルナは目覚めた。

まだきちんと覚醒していない頭で考える。

昨日は何があったか、と。

起き上がった状態のまま、宙を見つめて思い出す。

昨日はいつの間にか、彼の姿が消えていた　と。

そして更に思い出す。

昨日の月は、闇に消えゆく三日月だった。

今日は新月に違いない、と。

試しに手を出してみた。

昼間でも少しは能力は使えるのだ、夜、月が微かにでも出る日さえいれば。

しかし、手に氷が出現することはなく、ルナは無言で手を下ろした。

続いて、昨夜の彼の様子について考える。

行動がいつになくおかしかった。わたしが月のことを聞いた時か

ら。

「……………」

やがて彼女は、彼が『闇の貴公子』と呼ばれていたことに気がつく。

(…でも…それが何と関係していると言ったのでしょうか)

暫く考えたルナは、召使であるじいと呼んだ。

「なんでしよう姫様」

怯えた表情を必死に隠してじいが言う。

彼のこういうところがルナは嫌いだ。怖いなら、素直に怖いという表情をしてく

れたほうが、気は遥かに楽なのに。

「少し調べたいことができたのです。…図書館を使ってもよろしいでしょうか」

じいが眉を顰めた。

あんたが使うと、後の者が怖がり使えなくなる。そういいたいのね、とルナは感じた。

「他の方には見られないようにしますから安心してください」
どの道見たいのは、魔術に関する資料を集めた部屋。あまり人は入らないだろう。

。

「…畏まりました。ではその準備を直ちにいたします」

…なんの準備だ、と内心感じたが、無表情のままルナは頷いた。

じいはそのそくさと部屋を出た。

「……………」

残されたルナは、唯、立っていた。

不意に、彼女は自分の頬に水が伝っていることに気がついた。

白い手で水を拭う。

まじまじと、手にある水を、彼女は見つめた。

水は透明で、手を伝うと床に落ちて消えた。

それが涙だということを、彼女は知らない。

やることもなく、ルナは『準備』とやらだけを待ち、暇で退屈な時間を過ごした。

ルナはそんな時間を一日過ごし、いつの間にか、太陽が沈み始めた。

彼は珍しく家にいた。

寝転がり、天井に手を伸ばす。

「そろそろかな」

彼は窓を見て呟いた。

…空を、闇だけにさせない、夕暮れ時の魔法をかけに、彼は立ち上がった。

屋根の上になっていた、影のように真っ黒な青年を、下から見ていた者がいた。

キラキラした目で黒い青年を見ている。

彼はこの黒い青年が、これからすることが好きだった。

太陽が西に沈みかけていて、空は真つ二つに青と赤で分かれていた。

黒い青年は、その境目にたっていた。

まるで、彼が空の支配者であるかのように。

青年はマントを取り出し、サッと太陽に向けた。すると、太陽は隠れ、町は闇に

包まれた。

さらに、青年はパチンと指を鳴した。対比していた二つの空がひとつになり、星空が広がった。

星の光は弱く、闇に押し潰されそうなくらい細かった。

彼は何か物足りない、というように、不機嫌そうな表情になると、手を空に差し出した。

口を動かす。何かの呪文、だろうか。

すると、光が彼の手に集まったではないか。

光はみるみるうちに大きくなり、薬玉ぐらいの大きさになると、成長をやめた。

自分の顔より大きくなったそれに、青年はフツと息を吹き掛けた。すると、その光は四方八方に広がり、空へと舞い上がる。

やがて、それは夜空の星と手を繋ぎ、星により一層の輝きを与えた。

それらは、闇に染まりかけている青紫の空を鮮やかに彩った。

それを満足げに眺めて、青年はパツと消えた。

それと同時に、下でそれを見ていた者は、青年が住む部屋へと足を向けた。

「……ふう」

ティアーズは仕事を終え、一息つこうと紅茶をいれて、一人和んでいた。

毎日、闇を招くのは、彼の義務であり、役目だったが、新月の夜

は、星に力を貸している。闇夜に飲み込まれてしまいそうだから、溜め息に似た呼吸をし、紅茶のカップを持ち上げた瞬間、

「ビーンボォォン」

錆び付いたチャイムの音がした。

滅多に押されないチャイムが錆びるのは当然で、それも、このアパートもかなり古いものだから、少々錆び付いているのは分かるが、ここまで見事なものはない。ある意味、貴重品である。

「…はい？」

珍しいと思いながら、覗き穴から外を伺う。

目の前に顔があつた。全く見覚えのない。

「…何方様？」

不審そうに問う。来訪者が答える。

「ちよつと話に。…あつ、別に悪いもんでも怪しいもんでもねーよ
っ」

「……………」

「悪いけど、ここ、あけてくれねえか？」

何も言わずに戸を開ける。まあ変な奴なら、どこかに飛ばせばいいか…と思いながら。

扉の向こうにいたのは、金髪の少年だった。ティアーズと同じくらい…だろうか。緑色の瞳が、キラキラと輝いている。

「お前、ティアーズだろっ？」

「…そうだけど」

「オレ、ジェイド・カルサイト。奇術師やってんだ」

ほら、と何もない手から、髪と同じ金色のリボンを取り出した。

「…君も魔術師？」

「オレはフツォーの人です」

「…僕に何の用？僕の名前を知ってるんなら、噂も勿論知ってる？」

「うん、知ってるよ。闇の貴公子さん」

…此奴、僕を馬鹿にしてるのか？

「ティアーズがつくる空が好きなんだ」

（しかも、馴々しく呼び捨てかよ）

「だから友達になりにきた」

（第一、奇術師が僕になんの）

「¢ # & % § = } } ! ?」

ティアーズの、言葉にならない馬鹿でかい叫びに、ジェイドは耳を塞いだ。

「なんだよいきなり叫びやがって」

「き、君、今なんて」

「あ？」

「あ、じゃないよ」

ティアーズがそう言うのと、ジェイドはきょとんしながら答えた。

「友達になりにきた…っていったけど？」

「…君は根っからの馬鹿なのかい？」

呆れながらティアーズが言うのと、ますますジェイドはきょとんとした。

「なんで？ティアーズの友達になっちゃ、いけないのか？」

今度はティアーズがきょとんとする番だった。

「なんでだい？」

「何が？」

「どうしてそう思うんだい？君は」

ジェイドは一瞬だけ目を見開いたが、すぐにニタツと笑った。

「だって、ティアーズの友達になりたいから」

「…理由になつてないよ」

この男といると、なんだか呆れてばかりだ とティアーズは感じた。

「理由、必要か？」

「……………」

「必要なのか？」

真っ直ぐに見つめる緑の瞳に、ティアーズは困惑した。
今まで、こんなことはなかったのだ。

しばらくして、ティアーズは少しだけ、首を横に振った。
嬉しそうにジェイドは笑うと、手を出した。

「…なんだいこれは」

「握手！知らないか？挨拶がわりさ」

ティアーズはその手を恐る恐る握った。優しい温もりが伝わってくる。

「じゃあ、お世話になりまーす」

ジェイドはティアーズの手をはなすと、中に入ってきた。
慌ててティアーズは聞く。

「君、なんで家に入るんだい！？しかもお世話って」

「え？だって住むって言ったじゃん」

「…オイ、僕はそんな話、聞いてないぞ。」

「言ってないよ！」

「まーまー友達なんたからいいじゃん」

クラリと目眩がティアーズを襲う。

とんでもなくこいつは脳天気らしい。

「君ね…」

溜め息をつきながらいうと、ジェイドはどこからかステッキを取り出し、ティアーズに向けた。

「君、じゃない。オレはジェイドだ。ジェイド・カルサイト」

「…ハイハイ」

ステッキの先からでた花束を、ティアーズはとると、パチンと指を鳴らして消した。

大きな溜め息をつく。

とんでもないヤツが来てしまった…。

その頃、ルナはやつと図書館の魔術資料室に入った。

資料室といっても随分広く、元々は教会だったのか、それとも教会をイメージしたのか、奥には大きなステンドグラスがあり、真ん中に長い机、その両端に本棚にびっしり本が詰まっていた。

おまけに吹き抜けで2階まである。

入ってルナは溜め息をついた。

明らかに本の量は多い。ザッと見1000冊以上あるだろう。

「…まあ仕方ありません」

彼を知るには、これぐらいしか方法がないのですから。

ルナは片っ端から調べることにした。

『黒魔術』 『呪いをかけるには』 『魔術の歴史』 『魔法の仕方』
『世界の魔術師』 『魔女狩り記録本』 『魔法使いの縁』 … など。

気になる本を見つけた時には、もう外は真っ暗になっており、日付も変わろうとしていた。

「……………闇の魔術と光の魔術…」

白と黒の、シンプルな外見を持つその本を持つルナの手が、微かに震えた。

「何処行くんのだ？」

翌朝、朝食をとっているところ、不意に立ち上がったティアイズにジェイドが聞いた。

腰を浮かした黒い魔術師は不機嫌そうに眉を寄せる。

「気分転換」

「なんで？」

「原因は君だろ？なんか疲れた。出かけて来る」

「だから、何処へ？」

「宮殿。城」

「へ」

言うなりティアイズはパチンと指をならしてテレポートしてしまう。

残されたジェイドは曖昧に笑って、「ま、いっか」と横になった。随分お気楽なようだった。

「ルナ？」

ティアイズはルナの部屋の窓の前に来た。

窓から中を覗くが姫君の姿はない。

「……………」

帰ろうかと思った。

冬が来たせいで外は極寒地獄だ。明日は雪が降るといふ。くるりと窓に背を向けた。

が、何かの気配がしてティアーズは振り返った。

窓の向こう、部屋のドアから、大量の本を抱えたルナが現れたのだった。

「で、ルナは一体何をしてたんだい？」

非力な彼女が5、6冊も分厚い本を持っていた事自体不思議なことだった。

あれから慌ててティアーズは中に入り、ルナの持っていた本を部屋の片隅へと運んだ。

更になんと部屋の外にまた分厚い本が4冊。

全てを運び終えて、一息ついて、ティアーズが思い出してルナにそう聞いたのは
日が暮れてからだった。

「探してたんです」

「これを？」

「はい。1日かけて」

ティアーズは本の中の一冊を取った。

「ルナ、こんなの読めるのかい？」

ティアーズには読めない。何故かというと、その書物の文字はこの国のものではないからだ。

「ええ読めるわ。一応5カ国語はできますから」
「そう」

内心おかしく思った。彼女は外へ出ることを禁じられているのに、外国語が話せるなんて。

ティアーズは窓に腰をかける。

「じゃあ僕は邪魔かな」

「そんなこと…」

ルナは一瞬ふと考える顔をした。

それから小さく笑った。

「あるかもしれません」

「失礼だなあ…じゃあ今日のところはお暇させてもらつよ。…ああ
そうだ」

ティアーズはルナに布を渡した。

微かに光る淡い水色のスカーフだ。

「姫君に差し上げるにはそれなりのものと思ってね。シルクだよ」
「…何故？」

「明日は雪だつて聞いたから、風邪ひかないように」

もつとも、城の中は暖かいけれどね、とティアーズは笑った。

「じゃあ失礼するよ」

黒い魔術師は窓から下へと落ちて行った。

「……………」

ルナは彼がくれたスカーフを握る。

微かに残された温もりが、とても暖かく感じた。

「おつかえりーティアーズ お姫様には会えたか？」

「……………」

帰るなりジェイドが高い声で聞く。

溜め息。頭を抱えたティアーズはそこで気がついた。

「なんで僕が姫君に会いに行った事を知っているんだい？」

城に行くとは言ったが、姫君に会いに行くとは一言も言っていない。

なのに何故？

「んー…勘？」

「勘って…」

そこまでティアーズは問うのを辞めた。

此奴はそういう奴なのだろうから。

きつと真面目に答えないに違いない。

「可愛いんだろ？」

「そりゃまあね」

「今度連れてけよ」

「断る」

素っ気無い態度をとりながら、段々とティアーズはジェイドとい
るのが楽しくなってきたようだ。

…まだ警戒心は解いてないみたいだが。

「また夜が来るな。冷えそうだ」

「そうだね。明日は雪だな」

「？仕事しないのか？」

「毎日やるもんじゃないさ。自然と夜は来る。その手助けだから」
日が暮れ始めた街は冷気に包まれ、冷たくなって行った。

その晩から雪は降り始め、朝には40cmの積雪となった。
雪は朝まで降り続き、一時的に朝は雪がやみ、美しい銀世界が広
がったという。

しかし、実はその日の午後、城では騒ぎになっていた。

「月の姫君が消えた」

「ルナ様がない」

と。

朝起きて、外を見た。

ブルリと震える。寒い筈だ、とティアーズは一人で頷き納得した。窓の外は銀世界。

ふと隣りを見てみれば、タンクトップの寝姿。…ジェイドだ。

「……………」

よく寒くないな、と感心して見ていたが、やはり寒いのか、彼はブルリと震えるとかしゃみをした。と同時に起き上がる。

「さみい…マジ無理的な…」

此奴は、馬鹿だ。

ティアーズは無視することにした。

ジェイドは挨拶もせず、窓の外を見て歓声を上げる。

「うおっ！雪積もってんじゃねーか！」

言うなり家を飛び出した。勿論寝間着のタンクトップ姿で。

無論寒いに決まっている。

瞬間、ジェイドの「さみー！」という叫び声が辺りに響き渡ったのであった。

「全く、君は根っからの馬鹿なのか？」

暖かい室内に戻り、セーターを来て毛布にくるまり、ティアーズの朝食であるクラムチャウダーを奪い温まっているジェイドにティアーズは無表情で聞いた。

ジェイドはへへつと笑うだけだ。

「真冬にタンクトップはおかしいだろう？風邪ひいても僕は知らないからね」

「大丈夫だって、俺風邪なんてひいたことねーもん」

「馬鹿は風邪ひかないっていうからね。まあ余計な心配だったか」
仕方なくトーストにマーマレードをつけてティアーズは朝食を食べる。

ちらりと頭にルナのことか過ぎった。が。

「なーティアーズー少し付き合ってくれよ」

「何に」

「いーからさ」

早くも朝食を終えたジェイドがティアーズを引っ張った。

従って、彼がルナ王女の元へと参るのは、その日の夕方になってしまったのである。

ルナが起きたのは昼過ぎだった。起きると同時にブルリと震えた。部屋が寒い。暖房は聞いている筈なのに。

不思議に思っ窓に近寄った。

すると、外を見た瞬間、彼女は歓声を上げたのだ。

「わあ……」

今年初めて見る雪だった。しかもここまで積雪になることは滅多にない。5年振りくらいだろう。

ルナは思わず外に出た。

勿論、上着を着て、首にはあの黒き貴公子にもらった淡い水色のスカーフを巻いて。

「すごい……」

ベランダの手摺に積もった雪に触れてみる。

それはとても冷たい。

「白銀の世界ですね……」

はう、と溜め息を漏らしてルナはうつとりと目を細める。

そこでふと気が付いた。自身の髪色が、この世界と同じことに。

青みがかった銀色の長く美しい髪は、風に吹かれてサラサラと揺れる。

（ティアーズはどうしているのかしら？彼は今日来るのかしら？）

「ルナ様」

ドアの方でじいの声がした。

「おはようじい」

「おはようございますルナ様。そんなところにおいては風邪をひきます故、早く中へお入りください」

「…分かりました」

相変わらず煩い奴だ、とルナは眉を寄せた。

「朝食、いえ昼食はどうなさいますしょう？」

「そうですね…温かいものがほしいです。寒いので。あと少し軽いものがいいわ」

「ではそう申し付けておきましょう」

「用はそれだけね？」

「ええ左様でございます。では私はこれで」

じいは礼をして戸を開ける。

しかしルナが口を開いた。

「じい」

一瞬じいの肩が震えた。ゆっくりと振り返り、聞く。

「…なんでございましょう？」

そう言ったじいは笑いながらも怯えた表情をしていた。

ルナはそれにとらわれなかった。

「……雪ってどんなのかしら」

「姫様？」

「きつと冷たくて美しいんでしょうね、あんなに白くて輝いているんですもの」

「……………」

じいは無言で礼をし、戸を閉めた。

「……そんなにわたしのことが恐ろしいのですか、じい……」

哀しそうに微笑んでルナは外を見た。

空気までキラキラと輝いているような気がした。外から子供の遊ぶ声が微かに聞こえる。

「ちよつとなら……庭くらいいいわよね」

白いコートに白い帽子を被り、靴だけは黒いブーツをはいて、首にはあのスカーフを巻いてルナはベランダに出た。

そして慎重に庭へと降りる。

雪のおかげで少し底上がりした上、下に落とした木箱を足場にすると簡単に降りられた。

「きれい」

サクサクと歩く度に音が鳴る。

ルナは一人で庭の軒下を歩いていた。

その頃、上空では激しい雪雲が発達していた。

3時過ぎにはこの辺を覆い尽くし、激しい吹雪となることを天気予報が知らせていた。更に、この日は風が強かった。

しかし不運なことに、この天気予報をルナは見えていなかった。

不意に雪が降り出した。ルナは軒下から出た。

「……きれい」

空から舞い降りる雪を手にとって小さく笑う。自分では意識していなかった。

手にとった雪の結晶を見ては可愛い、と声をあげた。

そんなルナに、一つの突風が襲った。

「っ！」

一瞬よろめくほど強い風。

そしてその瞬間、スカーフが空へ舞い上がった。

「あっ」

慌てて手を伸ばすもスカーフはひらひらと飛んで行く。

ルナはそれを追いかけはじめた。

「姫様、お食事の用意ができました」

じいがそう言いルナの部屋に入ったのはそれから1時間も後のこと。

そのころには庭にルナの姿はなく、また、降り始めた雪のせいで足跡も消えてしまっていた。

もちろん慌ててじいは報告に行った。

そして、ルナの搜索が始まったのである。

しかし、それはあまりにも遅いスタートだった。

ティアーズが町の異変に気が付いたのは夕方だった。

ジェイドに連れられ町に出たティアーズは、いつもと違う銀色の町を散歩していた。

今日は何故か他人の目が気にならない。

と、ふと気が付いた。

ジェイドと一緒にいるからでもあるが、それ以上に町が騒がしいのである。

「何か町が随分賑やかじゃないかい？」

「雪が降ってるからだろ？」

「そうじゃないよ。ほら」

ティアーズは指を指す。

そこには、国旗のマークがかいてある服を来たメイドや執事、甲冑を来た兵隊などが町中に散らばっている。

「本当だ。何かあったのか？」

「それを聞いているんじゃないか」

「んじゃ聞いてみるか」

言うなりジェイドは道行くひとを捕まえた。

「ちよつといい？」

捕まえた人は若い女性で、彼女は辺りを見回し逃げ道を探したが、諦めて聞いた。

「なんでしよう？」

そう聞くときにジェイドをみた。と、同時に後ろにいるティアーズにも気が付く。顔が強張った。

「あの兵隊、なんなの？」

端からみればナンパに見えるだろうな、とティアーズは苦笑した。
「探してるんですよ」

「何を？」

「姫様ですよ」

「？ダイアナ王女がいなくなったのですか？」

ティアーズが口を挟んだ。

しかし女性は一步下がって首を振った。

「違いますよ。月の姫君です」

「！！ルナがいなくなったのかい！？」

ティアーズの驚きようにびっくりしてから彼女はゆっくりうなずいた。

「……ええそうですよ。ルナ姫：今まで王様は王女を隠してきたらしいけど、公表することにしたらしいわ。行方不明になったから総動員で捜させて、国民にも呼び掛けていますよ」

「だだよティアー…ズ？」

ジェイドが振り向いた時には、ティアーズの姿はなかった。

「…早速行っちゃったかー」

笑いながらジェイドは仕方なく家路についたのであった。

雪は日が暮れるにつれて激しくなってゆく。

ルナはスカーフを追いかけていた。

そしてスカーフが木に絡み付き、やっとなることができ、さあ帰ろうとルナは方向転換をする。

しかし、雪で先が全く見えない。第一、ここはどこなのだ。それ以前に、外に出たことさえないルナに、この辺の土地勘があるとは到底思えない。仮に雪ではないとしても、城に自力で戻るのは困難だろう。

誰かいないか、ルナは回りを見回すが、この吹雪の中、態態そとに出ている連中などいない。

（どうしよう）

迷子、という言葉がルナの頭の中をチカチカと照らす。

ルナは呆然と立ち尽くしていた。

しばらくして人が一人通りかかった。黒い影が見えたのだ。

「あっ…あの！助けてください！道がわからなく…」

しかしその人はルナには気がつかず行ってしまった。
ルナはそれから何度が通りかかる人に話しかけたが、誰にも気が付いてもらえなかった。

町には兵隊がたくさんいた。

少し外れた郊外にも、どこをみても城の者ばかりなのに、ルナは見つからないらしい。

ティアーズは勿論ひとりで探していた。
と、そのとき兵隊の話し声が聞こえて来た。

「つたく、姫様といい随分馬鹿だよな。なんでこんな日に外出るんだよ」

「だよなー。ああ、冷えてきやがった」

「しかも白いコート来てんだろ？なかなかミツカンねーよ」

「まったくだ。わがままもいい加減にし」

そこで兵隊の言葉は途切れた。

ティアーズが金縛りにしたのである。

「なっ！？なんだお前！体が動かねー」

「噂の黒い魔術師だ」

「マジ！なんだよなんの用だ！」

ティアーズは黒い服装なためか、雪の中では大きく目立つ。

「ルナはどこだ」

「なんだよ」

「彼女は何処へ行った」

「みつ見つかんねえから探してんだろ」

ティアーズは無言でその場を去った。

金縛りを解かずに。

「おっおい！」

そう叫ぶ兵士の声も耳に入らず。

ティアーズはルナを探しにすぐさま降り頻る雪の中へと姿を消した。

ルナは疲れ果てて座り込んだ。

ふかふかとした雪はクッションのようだったが、それはあまりにも冷たく、すぐにルナの体は冷えてしまった。ルナはできるだけ丸くなる。そこでふと考えた。

自分は肌も白い。髪色も白と似ている。瞳とスカーフは青だが、服装は見事に真っ白だ。

こんな真っ白な自分を、真っ白な世界で誰が見つけてくれるだろう？人通りも少ないここに、ましてや吹雪で目の前も見えない中で、雪に埋もれかけている真っ白な女を誰が見つけてくれるだろう？

もしかして誰も見つけてくれないのではないか。自分はここで背景に溶けて自然に消えゆく運命なのではないか。

慌てて力を使おうとルナは感覚がなくなりはじめた腕を持ち上げて力を入れる。

しかし力が出なかった。もともと少ない体力がさらに少なくなり、今のルナには体力がなさすぎて力が使えないのだ。

ルナは諦めた。もうきつと誰にも見つけれない。

所詮閉じ込められていたこの体だ。国民は自分の存在を噂では聞いているが、自らの目では確かめてはいないのだ。自分が消えたと

ところで支障はないだろう。

部屋にいただけの人生に思い残すことはない。

…ただ一つ、未練があるとするならば。

「…ティアーズ」

もう一度でいいから会いたかった。

あの人に。自分をあの箱の中から出してくれた貴公子に。

あの人が来るのをルナが毎日どれほど楽しみにしていたか、きつと彼は知らない。

彼はきつと今は暖かい部屋の中でのんびりしているのだろう。
彼は姫君の家来でも執事でもないのだから。

だんだん寒さを感じなくなってきた。

眠くなってきた。

重たい瞼をゆっくりと閉じ始める。

そのとき。

何かに呼ばれた気がした。

目をあける。ぼやけた中に黒い影。なんだか暖かい。

…ああわたしは死ぬんだ。

「…ルナ！」

幻聴も聞こえてきた。目の前にいたのは黒き貴公子だった。先ほ

どまでルナが会いたいと思っていたその人だった。

…幻だわ。

本当…ここで死ぬんですね。

「ルナ！」

ガクンと体がふられた。ルナはハッと目を覚ます。

靄も何もかかっていない世界で、白い雪まみれになったティアーズが目の前にいた。

「…ティアーズ？」

「大丈夫かい？」

「…本当に貴方？」

「凍傷を起こしているじゃないか。早く、肩に捕まって！」

まだ夢の中にいるような感覚のまま、ルナは弱弱しくティアーズの肩に手をまわした。

軽々とティアーズはルナを抱き上げる。

次の瞬間、ルナは暖房のきいた部屋の中にいた。

「…ティアーズ？」

「ルナ！よかった、心配したんだよ、君がいなくなっただって聞いて…」

「ここ、は？」

「僕の部屋だ」

はい、と暖かいレモネードをだしてティアーズが答える。

ありがとう、とルナはそれを受け取った。

「…探してくれたの？わたしのために」

「そりゃ…そうだよ。どうして外なんかに出たんだい？零下40度

の吹雪の中を！」

ティアイズの強い口調にルナは一瞬肩を震わせて答えた。

「…貴方から頂いたスカーフが飛んで行ったのよ。それを追いかけて行ったの」

「…あんなスカーフ、またあげるよ。だからもうそんなことはしないでくれ」

「あれがよかつたんです。あれじゃないとダメなの」

あなたから初めてもらったものだから。
そんな特別なものだから。

「…まあ…とりあえず。お城の人にもすつごく心配かけたんだからね？王さまなんか君のこと公開してまで探したんだから」

「え？」

ルナが戸惑った。

「公開した？…私の存在を？」

「そう」

頷いてそう返す。ルナがため息をついた。

「…そうですか」

王にとって彼女は邪魔な存在な筈だったのに。

心の中でいろいろな感情が交じり、彼女はもう一度溜息をついた。

「…ところでティアイズ？」

「なんだい？」

「聞いてもいいですか？」

「構わないよ」

「…どうしてわたしを見つけられたのですか？」

ルナの質問にティアーズは首をかしげた。

「歩き回っていた。そしたらルナがいた。…それだけだけど」

「だって」

ルナは納得しない様子でせがんだ。

「わたしは真っ白で…雪に溶けてしまいそうくらい白い格好をしていて。誰にも見付けられなかったのに…どうして？」

すると、ティアーズは一瞬驚いた顔をしてから、優しく微笑んでルナに言った。

「僕は分かるよ。君がどこにしよう、僕は見つけられる自信がある。たとえ周りが真っ白で君がそれと似ていても、やっぱり雪とルナは違うから」

それを聞いたルナは心がポツと暖かくなった。顔をそむける。ますます彼を見ているのが、なんだか恥ずかしくなった。

次の日、起きたらルナは自分の部屋のベッドで寝ていた。

「…ティアーズ」

ルナはそう彼を呼んでから、じいを呼び出すための部屋のベルを鳴らした。

寒さが続いた冬が過ぎ、春が訪れようとしていた。
日中はそれほど寒くはなくなり、陽光が輝き始めていた。

しかし温度のない光しかない夜はやはり冬並みに冷えている。

そんな季節頃の、昼。

「じい」

「なんでございましょう姫様」

「父上…お父様に、これを」

ルナが差し出したのは一通の手紙だった。

「姫様？」

「わたしのことを探して下さったのでしょうか？…こんなிரないはずのわたしを」

「姫様！そういうことはおっしゃってはなりません！」

「…じい、あなた、本当に心の底からそう思ってる？わたしのこと怖がっているのに」

「滅相もございません」

嘘、とルナが小さくつぶやいた。

わたしが姫、だから、彼は、じいはわたしのもとにいるのだろうか。

「じい…恐れおののくぐらいなら去ってください」

「いきなりどうなさったのですか、姫様」

「…なんでもありません」

変わった、と思う。自分でも。

以前はこんなこと口にはしなかった。心では思っていたが、それを口にするのが怖かったし、それを認めたくない自分がいた。

「じい」

ルナが自分の手を見て言う。

「欲しくてもらった力じゃない。わたしは好きで姫に生まれたわけではないのですよ」

「……姫様」

「お姉様は……きっと幸せでしょうね」

わたしは、ここに在る限り幸せじゃ、ない。

この国は男だろうが女だろうが王になれる。必然的にダイアナが次の王となる。

すぎ放題やれるだろう。そして国は荒れるだろう。

それはおそらく遠い日ではないだろう、とルナは眉をひそめた。

もう王も歳だ、そろそろ引退と言い出してもおかしくはない。

そのときだった。じいがそれを言ったのは。

「ルナ様。ダイアナ様は王権を投げだしました。」

…爆弾発言、とはつまりこういふことなのだ、とこの時ルナは実感した。

ジェイドは街中で手品を披露していた。もとからの日課だった。そしてその帰り。

裏町にひとりいるティアーズを見かけた。

声をかけようとした矢先、ティアーズが言葉を口にした。

「お前には関係ない筈だ」

一瞬ジェイドはじぶんがそこにいるのがばれたのかと思ったが、どうやら違うらしいということに気が付いてからは物陰からティアーズを見ていた。

「好きで生まれたわけじゃない」

「役目を課したのは彼だ。それに少し手を加えただけさ」

「…ルナは関係ないだろう?」

誰と話しているのだろう、とジェイドが少しでも体物陰から出すと。

「!」

誰もいなかった。ただ黒い『何か』がそこにいた気がした。

「行ってくれ、僕は僕だ。ほかのだれのものでもない」

クツと笑い声が聞こえた。…気がした。

「闇の種族のお前が?…お前は闇の僕だ。肝に命じておけ」

「僕は僕だ。ルナは…関係ない」

「お前の心を乱す者、関係ないはずがない」

「何をするつもりだ?」

ティアーズが黒いものを睨んだ。

「…楽しみにしておけ、ティアーズ」

「っ…待て！」

フツと、黒いものが消えた。

ジェイドはあわててその場所から逃げ出した。みてはいけないうなものを、見た気がしたから。

ジェイドとて目的なくティアーズに近づいたわけではなかった。

黒き魔術師。その辺の魔術師とは力が違う。理由は、何か知りたかった。それが知れば、自分も彼のように凄い力が手に入るかもしれないと思った。

（思ったより深く黒かったみたいだ）

今更後には引けない。彼が凡人ではないことは百も承知であったのに！

「…チツ」

小さく舌打ちしてジェイドは走る。面倒なことに足を踏み入れた、と本当に思った。

その頃の町で噂になっていた。

「ダイアナ様が王権を投げ出したって」

「なんだって？じゃあいったい次の王は誰になるんだ」

「ルナ様に引き継がれるんじゃないか？」

ダイアナが王権を投げ出したことは瞬く間に国に広がり、さらにはルナの相続権も同じように広がった。

この間まで隠された姫だった月の少女は一気に王の位を手に入れたのだった。

それを耳にした、黒い影が一つ。

黒いマントで身を包んでいる長身の男だった。物陰に潜んでいた黒い影はにやりと笑う。

「月の姫 …… 今にその純白を黒く染め上げようぞ」

「ルナ！」

「ティアーズ！どうしたの？」

いきなり飛び込んできた黒き魔術師にルナは吃驚した。彼の息は乱れており、心なしか顔色が悪い。

何か、あつたのだろうか。

「…大丈夫？」

ルナは手を彼の額に当てた。氷力の使い手であるルナの手は冷たい。

ひんやりとした心地のよい冷たさに、ティアーズが落ち着きを取り戻す。

「…無事？」

「何が？」

「君の事だよ！」

いつになくせっぱつまったような様子のティアーズがルナに叫ぶ。

「わたし？ああ王権のこと？」

あつけらかんというルナにティアーズが安心したのかドツと座り込んだ。

「…違うの？」

「ああ……そうだよ」

頷いてティアーズは溜息をつく。

「御姉様が投げ出したのよ。それどころか、いなくなってしまうて」

「…は？ダイアナ様が？」

「ええ、駆け落ちしたとか噂になっているけれど、多分本当ね」

苦笑しながらルナが言うと、ティアーズが笑った。

「はは…そうか、駆け落ち、か」

「笑いごとではありませんよ、ティアーズ」

「そうだ、ね。ルナはどうするんだい、王権はもはや君の手にあるんだろう」

「……」

ルナはしばらく沈黙した。

「…突然のことすぎて、まだ御返事はだしていません」
眉をひそめて。

「明後日にはお父様にお返事をださなければ…」

「…断るのかい」

断ることはかなわない。最早彼女はこの国唯一の王位継承者だ。

「…分かりません」

ルナは首を振る。はあ、と溜息をついた。

「……ルナ」

明らかに疲れているルナの前に、ティアーズは苦笑するとくしゃくしゃとルナの頭を撫でた。

「…ティアーズ？」

「深く考えなくていいと思うよ。君の望むままにやればいい。王が嫌ならば、ダイアナ姫と同じように拒否すればいいんだ」

「……」

「ね」

ティアーズは柔らかくわらった。

慌ててルナは顔を背けた。心なしか頬が熱い。

「…ルナ？」

「な、なんでもありません…」

「…じゃあ、今日は僕帰るから」

「え？」

「だって、疲れているだろう、君。だから今日は」

「ま…待って」

きゅっとティアーズの服の袖をつかみ、ルナは言う。

きょとんとティアーズはルナを見た。

「どうしたんだい」

「もうちょっとだけ…いてください」

それでも尚、ルナは顔をそむけたままだった。

ティアーズはきょとんとした顔でしばらくルナを見ていた。しかしふつと小さく笑うと、ティアーズはまたルナの頭に手を置いた。そつと、撫でる。

「わかった、もう少しだけ君のそばにいるよ」

今だけ。今だけだから。

君の隣にいさせてほしい。…僕が闇のものでも。

今だけ、と。そうしてティアーズはルナの髪を撫でる。

今だけでいい。隣にいたい。

…そう願うのは、いけないことだと知っていたけれど。

「…このへん、だったよな」

ジェイドは先ほど、ティアーズがいた場所にいた。

先ほどの会話、ただものではなかった。

彼は言ってた。闇の僕だと。

故に、彼は普通の人間はないということだ。

「…魔術師？ほんものの…？」

「お前は人間か」

突然に声が降りそそぐ。

しかし誰もいない。廻りに黒い霧が現れただけだ。

「…そうだ。俺はフツの、何の変哲もない人間さ。職業は手品師だが」

「そうか」

「…ティアーズ・アズライトは違ったようだな」

すでにジェイドは、この問題に足を踏み入れている。こうなったらもう自棄だ。とことん足を突っ込んでやろうではないか。

「そうだ、奴は普通の人ではない。人ならぬ力を持つ 闇の力を」
「闇…？」

「すべてを破壊しつくす力だ」

「ティアーズはそんなことしないぜ？」

「だろうな、あの愚か者が」

「……」

ジェイドは別に、ティアーズがおるか者だとは思わない。

いつも、闇を招くティアーズは、星と共に輝かせた。

そらが闇だけにならないように。光を与えたのだ。

「あいつの使い方は、本来の闇の力の使い方ではない。理に反する。ルール違反なのだよ」

「意味わかんね」

「分からなくていい。お前には関係のないことさ」

「お前は何者だ？」

黒い霧。それでも、それがひとだということをジェイドは分かっていた。

「ティアーズ・アズライトと同じ、闇の僕…」

「……」

「我々がこれからはこの世界を支配する」

「は？」

「光の種族が王権を握っている。其の姫に染みをつければいいのだ
月光姫に」

「……」

「ティアーズが近づいたおかげで、やりやすくなった」

「……その、月光姫って」

「ルナ・ルーチェ。この国唯一の王位継承者」

「！」

「あの娘は純白でできている。彼女の魔力も、彼女が白いからこそ
使えるもの。この国は彼女の魔力により安定を保っている。その力
をつかえなくすれば、世界は我々のものになる」

「……」

「ティアーズ・アズライトに付き添っている…ジェイド・カルサイ
ト」

「……」

「手を組まないか。奴を今日の夜、監禁するだけでいい」

「……」

「成功したあかつきには、お前に力をやろう。あいつをも超える力
を」

「……」

ジェイドは黙ったままだった。

「……どうする？」

黒い霧は、そう聞いて揺らいた。
ジェイドはうつむいた。

そうして夜がやってくる。

「…また、あした、来ていただけますか」

「ああ、君が望むなら」

窓からティアーズは帰っていく。

その姿を見送り、ルナは胸をおさえた。

「……………」

この、胸の疼きは、何？

彼がいないと嫌だ。

でも彼がいると鼓動がおかしくなる。彼に触れると鼓動が速くなる。彼の声を聞けば、頬が熱くなる。

この熱は、いったい、何？

「…ティアーズ……アズライト」

きゅっと目を閉じる。

しかしルナはすぐに目を開き、キツと踵を返した。

「何者です」

見えない空間。部屋の中には誰もいない。
しかしそこには何かがあった。黒い、何かが。

「…流石光の者。気配には敏いらしい…」
「……」

すうつと黒い霧が渦巻く。
そうして中から現れたのは、一人の青年。
黒い髪に黒い瞳。纏う衣も黒。

「ルナ・ルーチェ様、あなたにお会いしたかった」
「……」

ルナの青い瞳に黒い青年がうつる。ルナが彼をキッと睨んだ。

「……何者です」
「私は、闇の僕」
「！」

ルナはそれをきき一步下がった。
本で得た知識。ティアーズのために調べたもの。彼を知ろうとしたときに、知った、闇の力のこと。
それは、ルナには恐れるべき存在だったのだ。

闇は、光を飲み込む。
黒は、白を染めてしまう。

それでもティアーズと一緒にいることは怖くなかった。
彼は、そんなことをしないと断言できるから。

それでも、闇の者、は。
このひと、は。

「ルナ・ルーチエ。あなたの敵だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7826e/>

black-and-white

2010年12月21日02時43分発行